



CLUB BULLETIN

R. I. 第 2530 地区

いわき勿来ロータリー・クラブ

会長 越田和俣充

幹事 小澤 啓一

SAA 鈴木 雅之

会報小委員 遠藤 洵

○例会日 毎週水曜日 (12:30 ~ 13:30) ○事務局 TEL/FAX (0246) 56 - 3473
○例会場 ホテルミドリ E-mail:info@iwakinakoso-rc.jp

第 2835 回 例会 令和 2 年 10 月 28 日 (水・晴)

2020 - 21 年国際ロータリーのテーマ
ロータリーは機会の扉を開く

会員卓話 高瀬政男会員

ロータリーソング 我等の生業

— 今月は経済と地域社会の
発展・米山月間です —

4 つのテスト
久野 裕紀 会員



◎会長報告—越田和俣充会長

皆さん、初めに先週に続きまして悲しいお知らせをしなければなりません。すでにご存知の通り、当クラブの本間敏一会員が先日お亡くなりになりました。先週の例会の出席時にお会いした時も体調はかなり悪そうだと感じておりましたが、こんなに早くお亡くなりになるとは思いませんでした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。話は変わりますが、先日の例会時の私の挨拶でそろそろ夏も終わり秋の気配を感じるとお話をしましたが、「あっ」と言う間に朝晩寒さを感じるようになり、後 2 カ月程で新年を迎えようとしております。そんな中、いわきで新型コロナの感染が確認されました。会員の皆様にはどうかコロナに負けずに万全の体調で残り 2 カ月を乗り切っていただきたいと思います。本日の卓話は会員卓話となっております。どうぞ宜しくお願いします。

◎幹事報告—小澤啓一幹事

- ・国際ロータリーから 2022 年規定審議会について案内が届いています。
- ・地区大会 4 月 3 日に予定した分を 11 月 21 日に分けて実施します。21 日会長幹事、パストガバナー、地区出向者が出席で行います。
- ・補助金管理セミナーの案内が届いています。これは会長が出席することになっています。
- ・週報が届いていますので回覧致します。

◎各委員会報告

◇出席委員会—高萩勝利小委員長

本日の出席状況は下記の通りです。今年度の平均出席率は 75.93 パーセントで大変出席率が悪くなっています。皆様のご協力で出席率向上を宜しくお願い申し上げます。

◇スマイルボックス委員会—佐藤政司小委員長

・本間敏一会員のご冥福をお祈り致します。越田和

会長、星副会長、嵐会長エレクト、小澤幹事、斉藤、佐藤(政)、清水、渋谷、高萩、鈴木、影山、赤津(善)、柏原、渡邊公平パストガバナー各会員

・前回休んでごめんなさい。

川口、高橋、木村(義)、久野、鈴木(雅)各会員
・本日早退ごめんなさい。 大平会員

◎会員卓話



米山記念奨学会 高瀬 政男 委員

皆さん、こんにちは。米山梅吉さんは、1868 年(慶応 4 年、明治元年) 2 月 4 日、江戸の芝田村町の武家屋敷で、大和の国高取藩士、和田竹造の三男として生まれました。4 才の時、父親が他界したために一家は伊豆の三島へ引揚げたそうです。ここは母親の郷里で三島神社の宮司、日比谷氏の娘であったからです。小学校は、長兄の栄次郎が助教師をしていた駿河の映雪舎と云う所に入学したわけですが、学校の成績は抜群で、幼少時より神童と云われ、その上、眼のクリットした美少年であったために、代々名主を務めていた土地の大地主の米山藤三郎の養子に懇望され、そのために和田梅吉は、米山梅吉と名乗る事になり、それは 12 才の時だったそうです。尋常高等小学校を修了した 14 の時、沼津中学校に入学しました。梅吉少年は、友達も多かったのですが、楽しい中学生を送る事が出来たようですが、そうしているうちに、将来を考えてみるようになり、このままでゆくと旧家を継いで、大地主の若旦那になり、このまま一生を過ごさねばならないかも知れない。こうした前途に対する煩悶から、ついに家出を考えた様になったそうです。沼津では、もう学ぶだけ学んだ。この上は、どんな苦学してでも、その上の勉強をしたいと云う強い願望がついに彼をして、無断家出を決行させてしまったのが、16 才の時、箱根を越えて、横浜へ出て、

そこから初めて汽車に乗って東京に着いたわけです。東京の塾では、どこでも学業をしながら、勉強していましたが、アメリカへ行けばスクールボーイをしながら、大学に通えると言う事を聞き、新しい西洋文化への憧れはついにアメリカ留学の決意をさせてしまったわけです。その渡米の旅費を作るために、ひとまず東京の史員試験を受けて就職し、芝愛宕町に借家して、三島がから母親を呼び迎え、昼は勤めにて、夜は銀座の福音英語学校に通って渡米のための準備に余念が無かった様です。青雲の志を抱いて、東京に出て 4 年たった 20 才の時、この間に養父の怒りに触れて東京での苦学中 4 年間、そしてアメリカにも留学中の 8 年間、遂に養父から経済的支援を受ける事が出来なく完全な苦学生として、アルバイトをしながら、特に文学に力を入れて勉強を続けたそうです。1895 年(明治 28 年)に帰国した米山さんは、翌年三井銀行に入行し、年を経て 1900 年には 42 才で常務取締役に昇進し、出世街道を邁進したと言えると思えば大正と変わり、米山さんは財界の重鎮へと上りつめ、ロータリーとの出会いがあったわけです。というのは、大正 6 年丁度 50 才の時、政府は男爵の日賀田種太郎を団長とする米国への財政調査団に加わり、正月をテキサスのダラスで迎えました。ここには三井物産の支店長、福島喜三次を訪ねたわけですが、福島さんは、すでにダラスクラブの会員であったので、米山さんは、ここで初めてロータリーの話聞く事が出来て、非常に興味を覚え同時に R I 本部からも、日本にロータリーを創りたいと言う構想が生まれ帰朝し、その後 2 年余りロータリー精神と組織の研究に務めたそうです。米山さんは、向学心に燃えながら、学費に窮する学生に援助を惜しまずその面倒見の良さは実に行き届いて大きな感動を与える事もしばしばあったそうです。ようやく、1920 年、大正 9 年 8 月、銀行クラブに 18 名を集めて説明、9 月 1 日發起人会開催、10 月 20 日銀行クラブに 24 名が出席して創立し、東京ロータリークラブが誕生したわけです。翌 1921 年 4 月 1 日付けで、登録番号 855 号をもって承認されたわけです。初めは、会員の選考が極めて厳格で、特に語学には注意が払われまして、クラブの記録通信なども一切英文だった様です。創立当初は、出席率がよくなかったり、定款・細則に対する関心も薄く、例会も定期的に行われなかったりして、クラブの存続が危ぶまれる雰囲気漂っていたといわれていました。1923 年 9 月 1 日、午前 11 時 58 分の関東大震災は、日本のロータリーの運命を大きく変えることになりました。関東一円、特に東京・横浜は、この地震によって壊滅的な被害を受けましたが、これを耳にした当時の国際ロータリー会長、ガイ・ガーデーガは、お見舞いの電報をとともに、2 万 5,000 米ドルを被害に遭っていない大阪クラブを経て送られて来たのをはじめ、シカゴクラブが 1,500 ドル、サンフランシスコ、ニューヨークの各クラブが、各 1,000 ドル、その他、各国の 503 のクラブからも続々義援金が寄せられ、その総額は、8 万 9,000 米ドルに達しました。このことによって、東京クラブの会員たちは、初めてロータリーの運動の何たるか、ロータリークラブとはどういうものなのかが、身に染みて理解できたといわれています。東京クラブは、その義援金を東京・横浜の小学校の再建や、被災者救護、残食警察官遺族への援助などに使った

そうです。さらに東京孤児院内に新築 1 棟を寄贈して、「ロータリー・ホーム」と名づけました。そして 1924 年 10 月 23 日開館式が献呈式を兼ねて行われた際に東京クラブの会員の 6 割が家族を伴って参列したそうです。これが日本におけるロータリー家族会の最初のものと言われている様です。これはさらに 10 年後に修理されまして国際ロータリーを離脱するまで東京クラブの社会奉仕事業として誇りにされていた様です。その後国内でも神戸、名古屋、京都、横浜に誕生し、昭和 15 年 4 月には 48 クラブ約 2,000 名に成りました。米山さんは、向学心に燃えながら、学資に窮する学生に援助を惜しまず、その面倒見の良さは実に行き届いて、大きな感動を与える事もしばしばあったそうです。米山さんの死後、歌人の佐々木信綱氏は、「米山梅吉君を懐ふ」と題した文で、佐々木氏の知り合いである青年が大学に進学したが学費に困っていると言う話をしたところ「未来ある人なら」と 3 年間の援助を申し出て第 1 回の援助金を佐々木氏に手渡す時「米山と言う名を先方に告げて下さるな、ただ遠くから見守っているからと激励して渡されたい」と言われたそうです。自分の名を出すのを好まず常に無名の激励の方だったそうです。米山さんは、1946 年 4 月 28 日(享年 78 才)ご逝去されました。米山翁の告別式で援助を受けた大勢の方が参列されたその代表の方が弔辞の中で、今日私があるのは先生のおかげですと読まれ、それでロータリー関係の方々には初めて援助の事を知ったわけです。こうして幾人もの人々が、日本のロータリーの父、米山翁の遺徳を永久に偲ぶ事の出来る何か有益な記念事業をやるのではないかと、太平洋戦争が世界の国々、殊にアジア諸国に与えた大きな損害と迷惑に対する深い反省から、将来の日本の生きる道は平和しかない。その平和日本を世界に理解させるためには、まず何よりアジア諸国の理解を得なければならない。それにはアジアの国々から一人でも多くの留学生を日本に迎え入れて、平和日本を肌で感じてもらうしかない。そのために、ロータリー財団の奨学事業のようにしっかりした国際奨学事業を始めてはどうだろうか。それこそ、日本のロータリーに最もふさわしい国際奉仕事業ではないだろうかと言う結論に達したそうです。「米山基金設立」の構想試案が当時の会長によって示されたのは、1952 年(昭和 27 年) 11 月 4 日で今日の「財団法人ロータリー米山記念奨学会」の基礎となる「米山基金」のスタートですが、当初は日本のロータリーの全体の活動ではなく、東京クラブ独自の試みとして構想されたところに特徴があったのではないのでしょうか。この制度の成案が可決されたのは、日本の独立間もない 1952 年 12 月で、翌年 2 月には募金計画が決定し、会員有志から 1 口千円以上、法人からは 1 口 1 万円以上をもって目標 260 万の浄財を募ることが出来たそうです。面白いことに寄付第 1 号は東京クラブの例会の常連であった米国人ウイリー・ネルソンで募金のほうは順調に進んだが奨学生の招致は容易でなかったようです。奨学基金は将来全国的事業に発展させたいと言うのが当初からの理想だったので、そこで他のクラブへの呼びかけを始めたところ続々と賛同を得て、1958 年のロータリー米山奨学会設立となり、さらに 1967 年には「財団法人ロータリー米山記念奨学会」となったわけです。

出席状況	正会員数	46 名	カード出席	2 名
	本日出席会員数	28 名	本日の修正出席率	65.22%